

研究部通信



発行:令和3年8月31日
文責:研究部
第2号「目標と評価規準②」

単元の目標と評価規準のルール～算数科/数学科～

授業の「導入」部分は言うまでもなく大事な場面ですが、子どもの興味・関心を高めるという名目のもとに、本題に入るまでに時間をかけ過ぎるケースがあります。私自身よくやっていますが、自分の指導案に合う意見が出てくるまで子供とのやりとりを続ける、ということは時間の使い方としていかがでしょうか。

特に問題解決型の授業で一番大切なのは、解決の段階になったときにこそ、子供の声にきちんと付き合うことです。その大切な時間を確保するためにも、スタートはスパッと本題に入るようにしたいですね。

さて、右の表は算数科/数学科の学習指導案作成で使える、単元の目標及び評価規準それぞれの文末表現です。参考にしてください。



教科	観点	知識及び技能 (知識・技能)	思考力・判断力・表現力等 (思考・判断・表現)	学びに向かう力、人間性等 (主体的に学習に取り組む態度)
算数 / 数学科	目標	文末は「～できる」「～を身に付ける」として示す。 (文例) ・活動を通して、登場する数詞や数量の変化、形の違い、曜日の移り変わりに気付くことができる。 ・連立二元一次方程式についての基礎的な概念や原理・法則などを理解するとともに、事象を数学科したり、数学的に解釈したり、数学的表現・処理したりする技能を身に付ける。	文末は「～できる」として示す。 (文例) ・活動に登場する数詞や数量の変化に気付く、数えたり、指で表現したりすることができる。 ・形の同一性に気付く、かごに正しく分類することができる。	文末は「～しようとする」「～しようとする態度を身に付ける」として示す。 ☆但し、当該学部、段階の目標ウ(「算数(数学)で学んだことによさや～(以下略)」)を軸に設定すること。 (文例) ・数詞や数量の変化、形のの違いに関心をもち、進んで数えたり、操作したりしようとする。 ・連立二元一次方程式について、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して粘り強く考え、数学を生活や学習に活かそうとする態度、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を身に付ける。
	評価規準	文末を「～できる」「～している」とする。 (文例) ・形の同一性や違いに気付く行動している。 ・数量の変化、曜日の移り変わりに気付く、カードや教員の身振りに注目している。	文末を「～している」「～できる」とする。「内容のまとめり」の説明部分等を加えて示すこともある。 (文例) ・カードの同一性や違いに気付く、正しく分類している。 ・数量の変化、曜日の移り変わりに気付く、カードや教員の身振りを模倣している。	文末は「～しようとしている」と示す。 <①粘り強さ②自らの学習の調整③他の2観点において重点とする内容④当該単元の具体的な数学的活動> の①から④の内容を全て含め、単元(や題材)の目標や学習内容等に応じて、その組み合わせを工夫して示す。 (文例) ・数詞や数量、曜日の移り変わりに関心をもち、自ら関わろうとしている。 ・連立二元一次方程式の必要性と意味を考えようとしている。 ・連立二元一次方程式について学んだことを生活やその後の学習に生かそうとしている。

教育動向コーナー ～教師として知っておこう～ テーマ:「学力調査のCBT化」



CBTとは、「Computer Based Testing」の頭文字をとったもので、文字通り、コンピュータを使ったテストのことです。2020年現在、全国的な学力調査をCBT化しようという議論が進んでいます。2つの理由を以下に示します。

理由(1)国際的な潮流

完全なCBT化が行われたPISA2018の日本の成績が振るわず、日本の学校教育でも日常的にCBTを実施できる環境を整備するべきだ、という声が高まっていること。

理由(2)新型コロナウイルスの影響

対面授業が難しくなったため、代替手段としてコンピュータを使った学びが注目を集めた。

～CBT化のメリット～

- 受験した人の学力に見合った難易度にテスト内容を変えることができるということ。紙のテストと違って、CBTでは出題する問題をテスト中に差し替えることができるため、学力の高い人にはより難しい問題を、低い人にはより簡単な問題を出題することで、紙のテストよりも正確に受験者の学力を測定することができる。
- 択一式の記号問題であれば、あらかじめ正解を入力することで、テストが終了した直後に試験結果を知ることができる。
- モニター上で図形を操作する、動画や音声を使うといった出題が可能になる。
- モニター上の文字を大きくしたり、音声で設問を読み上げたりすることもできるので、視覚や聴覚に障がいをもつ人もテストに受験しやすくなる。

～CBT化の問題点～

- CBTに必要なコンピュータや通信環境が整っているか。
- 子供たちがコンピュータに触れているかどうかによって、新たな「学力の格差」が生じるおそれがある。(授業の有無や家庭環境も含む)
- 調査を設計・利用する側にも、システムの複雑さに見合うだけの専門的な知識が必要不可欠になる。外注すればよいという考えもあるが、教育関係者は誰もテストの仕組みがわからないまま、コンピュータが弾き出したテストの点数に従うしかないという社会が到来するかもしれない。



いかがでしょう。「CBT化の問題点」を眺めると、私たち教師次第ではないか、と感じられるものが多いということが印象的です。情報教育部の先生方に頼り過ぎたり、「今の能力の範囲」でできることに操作を限定したり、ということに心当たりはありませんか?失敗から多くを身に付けるならば、今がチャンスです!

「つまみぐい」パワー



文献の一部抜粋から多くを学ぶコーナーだよ!

学習評価について指摘されている課題

- ・ 学期末や学年末などの事後での評価に終始してしまうことが多く、その結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない。
 - ・ 現行の「関心・意欲・態度」の観点について、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていない。
 - ・ 教師によって評価の方針が異なり、学習改善につなげにくい。
 - ・ 教師が評価のための「記録」に労力を割かれて、指導に注力できない。
 - ・ 相当な労力をかけて記述した指導要録が、次学年や次学校段階において十分に活用されていない。
- といった課題も指摘されている。

「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」

平成31年 中教審「一部抜粋」

「教師によって評価の方針が異なる」という点については、教師間のコミュニケーションの必要性に迫ったものです。なかなか時間を取ることは難しいと思いますが、平日頃、授業作りの視点や評価の場面を共通理解した上で、一人一人の教師が「自身の考え方」を明確にし、伝え合うことを習慣化しておく、解決に近づくようにも思えます。

また、「記録」に労力を割かれる、という問題については、本校の教務部と研究部を中心に取り組んでいますが、良いアイデアがあれば、是非遠慮なくお知らせください。

今回の記事の参考・引用文献

- ・「熊本県学習構想案作成のポイント」(熊本県教委 HP)
- ・「知的障害特別支援学校における「深い学び」の実現」(監修 横倉 久 東洋館出版)
- ・「最新教育動向2021」(明治図書)
- ・「CBT化をめぐる状況について」(令和2年 文科省)
- ・「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」

(平成31年 中教審)